

く宗祖此の名を勧め給ふ所以は、もつばら俗を引かん爲の術計のみ名よく何をかなさんと此れ實に
五字は一部の心なる事を知らざる爲なり『報恩抄
に曰く疑て曰く廿八品の中に何が肝心乎や？答へ
て曰く或は品々皆な事に從て肝心なり或は曰く方
便品壽量品肝心あり或は曰く方便品肝心なり或は
曰く壽量品肝心なり或は曰く開示悟入肝心なり或
は曰く十相肝心あり。問ふて曰く汝の心如何答ふ
南無妙法蓮華經肝心なり、『五品抄』に曰く妙法蓮
華經の五字は經文にあらず其の義にあらず唯一部
の意耳云々。正に知るべし五字は法華一部の意にし
て久遠本佛の智慧なりと云ふ事を吾人朝夕本佛の
智慧たる五字を以て本佛の本体に對して晶題しつゝ
あるなり『經に曰く』是人於佛教決定無有疑と
『釋に曰く』妙法經力即身成佛と成佛何を疑はむ

(以下次號)

興師身延離山考

中五 太田 純 志

宗門原始時代に於ける、諸先師の事蹟を莖才淺
學の輩等云々し奉るは、甚だたこがましき事にて
又難中の難事たり。其の研究資料に苦しむは勿論
なれど、史實の取捨撰擇等に至りては是れ眞あり
てふ自覺に到らざる已上、全々爲し得ざる所なり。
吾宗門分派史中、暗々裏にその萌芽を發せしは、
太田方の不讀述門の異計に起因し、滅後數年にし
て富士興門流具現せり。之に付て、興師身延離山
問題古來の先哲間に所説甚だしく多岐にして、吾
等後陣輩の大に迷惑する所たり、彼云く波木井公
四箇の謗法によると、此云く、事實無根ありと、
或は云く、五一相對本迹問題と、或は云く、一端
の感情問題と、或は云々云く、と予傾日來該問題に關
せる史料の二三を得たるにより、左に提出し以て
先賢各位の御垂示を仰がんとするものあり。
始に當派より列舉せんか、六牙院海音潮公は其
著『本化別頭佛祖統紀』に『弘安八年乙酉 日向尊者
直ニ于身延ニ檀越波木井氏實長告テ日高祖ノ霜塔輪次
守レコト之ヲ也其式雖ニ顧命嚴重ナリト而爲レ法爲レ山ノ至

而^ハ不^レ宜^シ所以者何諸山、以^ニ主人在^テ諸位齊^シ志^ラ山門追^テ日而盛^リ身延山、者不^レ然主^ヤ也徒^ヤ也爲^ニ旅泊之想^ヲ兩序不^レ和淨界逐^テ年^ヲ而衰高祖棲神^ノ之靈窟一家之祖山佛日若就^カ荒涼^ニ嘆^レ臍^ヲ何^ノ益^カ之有[、]尊者夫熟^ク謀^レト之^ヲ向^ニ尊聞^テ之^ヲ以^テ告^ニ昭朗^ニ尊^ニ尊^ニ尊^ニ無^ハ人議^{スル}モ之亦可也我等六人齊^リ承^リ最後^ノ之嚴命^ヲ未^レ滿^ニ一^ニ紀^ニ高祖^ノ聖鑑無^レ監^レ乖^レ反^何速^{ナル}法運^ノ通塞^リ者弗^ニ千^ニ俗^ノ家^ノ所^ニ能^レ識^レ慎^ニ諸^ノ實^長聞^テ而不^レ喜曰護法^ノ之一語衆皆不^レ背公獨痛^ク槌^提者何^ッ耶似^レ媒^ニ非^レ禮^ニ我與^レ公絶^ン耳由^テ是^ニ師^モ亦振^テ衣^ヲ而立^ク又云[」]或人曰我聞^ク與^尊門人迄^{マテ}今^ニ背^ニ祖山^ニ非^乎曰然也尊者護^ニ持^ニ高祖^ノ願命^ヲ而不^レ移與^ニ波木井實長^ニ絶^矣是以富木氏比企氏池上氏亦絶^矣昭朗尊等^モ欲^レ不^レ絶^レ而得^{シヤ}乎波富比池^ノ四家^ハ者護法^ノ大檀越^ニ是時宗門艸味唯六尊四家^ノ也耳故不^レ善^ニ者六尊^モ亦不^レ喜^レ之^ヲ文^と論^じ、波木井公の老婆心をが濫觴あり、衝突離山の原因を記せり、又諦者二師合著『年譜攷異』には『甫^テ正應元年十月南部氏止

守塔ノ輪次^ヲ師[（]與[）]實長^ニ有^レ卻^マ去住^ニ大井^ニ文^と、又近來著述に顯れたる各先聖の史傳を考するに、小林日董師著『日蓮宗綱要』三國高僧略傳『磯野師著』日蓮宗史要』北尾師著『日蓮宗綱要』境野黃洋著『佛教小史』小川泰堂氏『日蓮大士眞實傳』菱沼哲之介著『日蓮宗高僧傳』等皆統紀説を依用せるが如し。次に、彼門流に及び、先輩吉田素恩師所論の與門教學研究資料中、數多の參考書目を見れども、如何にせん其の半數だにも披見するを得ず左に記する資材の如きは、世人の嘖々贈灸せられつゝあるものゝみ。三位阿闍梨曰願述『肌脉譜』に云く『次^ニ口與上人^ハ是^レ日蓮上人付處本門所傳、導師也稟承超^ニ五人^ニ紹繼並^ニ章安^ノ所以者何五老間^ク號^ニ天台流^ト富士直^ニ稱^ニ地涌^ノ眷屬^ト章安能記^ニ大師遺説^ト興師廣^ク宣^ニ聖人^ノ本懷^ニ同師著[」]用心抄』に云く『日蓮上人、法門日興紹繼々々、法體日澄和尚類聚々々興歎師先立^テ没^ス上人常^ニ誓願^{シテ}云先聖逢值、五老猶有^レ謬誤[」]早世已來、弟子定懷^ニ非義[」]又重須大學頭日澄上人曆應五年卅三回忌報恩會の砌、

敬虔表白文に云く「弘安五年初冬圓寂之刻（宗賞、
上_二首六人_一定_二没_一軌範_二而_三五老_一深_ク爛_ニ本迹
不二_一之途_二頗_ル號_ス天台沙門_一富山獨廢_二正像_一己過
之權迹_二新_ニ弘_ニ本地之妙法_一云々至囑々々（文又、日
興遺、誠置文二十六個（一富士、流義、聊カ不_レ達_ニ先
師ノ御弘通_ニ事_一五人ノ立義ハ一々違_フ先師ノ御弘通_ニ
事_一又、日興師自著と稱する存知抄に云く「滅後廿
年義絶條々事釋迦如來造立供艱可_レ奉_ニ本尊_一是次
聖人御存生九箇年之間被_ニ停止_一參詣其年如矣（二所
三島致_ニ參詣_一是次一門勸進號南部郷福司塔供艱奉
加有_レ之_一是_二一門佛事助成號九品念佛道場一字建立
莊嚴之_一甲斐國其處是己上四箇條々之謗法教訓日
向許_レ之_一云々、又、有名なる五人所破抄と稱するあ
り、（或云富山立義抄又六）三位日願興師の命を受け、
澄師の遺業を紹繼し代作せるものなりと、之れ滅
後に於て五老幕府に安國論を献せし事ありと、三
位日願血脉譜云ク「但本師補任、六人之内五師ハ注_ニ
進_ス天台ノ沙門_一日興獨_リ擧_グ先聖ノ遺弟_ト」文富谷旭霽
師論して云く（大崎學報 第廿二號）宗門史下中、同書を以て遙

かに後人の贋作として、上足六老諸師間には、後
世興門教徒の云へるが如く、本迹勝劣杯云ふ宗義
上の異見はあかりしと斷ず、夫れ一理たる様かれ
ど、はたして所論妥當なりや、當書製作たる嘉曆
三年は、五上足皆歸寂して所謂法子又は法孫の師
業紹繼期節にあらずや、若し公平ある批評的立脚
より視れば、秩序紊亂は必無など斷せられず、故
に、宗祖聖人の正誦相承として歟、又警世宣言と
して歟、難詰對破せる者歟、別に大聖人御自著と
して傳ふる『本因妙抄』一名血脉抄云く「七回忌後披_ニ
見之_一」と其始中終を一貫して、唯本因妙の法義を
説明せるものにして、什門流の受師は傳教の「牛
頭決に擬せる後世の僞作なりと判ず（吉田師）又興尊
より波木井公へ最後の書に云く「佛ハ上行無邊行淨
行安立行之脇士ヲ造副ト進_キ久成ノ釋迦ヲ造立_シ進_セテ又
安國論ノ趣_ニ不可_ニ違_ニ進_ニ」文又興尊原殿御返事云
く「身延山を罷り出て候事面目なき本意かく難_ニ申
盡_ス候へども打ち還し案じ候へばいづくにても聖
人の御義を相繼ぎ進せて世に立て候はん事こそ詮

にて候さりとも奉_レ思ひ御弟子悉く師敵對せられ候_レ』文又別翰原殿御報に云く『惣して此事は三の子細にて候一には安國論の正意破れ二には久遠實成の釋迦の木像最前に破れ候三には謗法之施始めて被_レ施候又此事共二入道殿之御失にては渡らせ候はず偏に滔曲したる法師の過ちにて候』文法師とは特に、民部阿闍梨日向上人を指す、五人所破抄云く『五人謗法富士正義、一大聖人御抄可_レ爲_二和字一事、一謙倉五人云天台沙門無謂事、一一部五種行過時之事、一一念佛之事、一天目房不可_レ讀_二方便品一立_二大謗法一事』已上又身延讓狀並に池上相承を珍重す、然れども興尊離山孤立は但に、波木井公との關係に由る歟、五一相對本述論に由るもの歟他門徒八品流拜して云く『然れども興門流主張は、波木井公謗法を事とあす、之れ實踐的方面の事にして、何等教理上理論上の争闘に非ざりき、然るに第二原因とも見る可き、勝劣論後年に漸次門下の攻究の結果其の分裂の一原因と爲れり』と、事觀曰（天明四年著）宏著彙珠懸頸錄（本興寺學徒）第三十六番問答下興師

退_二延山_一所以等_レ破云任_二己情_一吐_二種々_一義_二莫_一下_レ所_レ當_二今謂興師退_二己身延山_一由_二波木井侯_一三種謗法_二也五人所破抄云_レ身延群徒猥_レ疑_レ說_レ地頭爲_二非禮_一可_レ恐_二先師_一遺_レ跡_二文此書末法付要錄の唯授一人血脉相承立義を破すとあり。然らば吾流の先師は如何なる意見を有し居りしか、本迹決要抄日澄師著曰く『天目ノ書_二鈔_一ニ云ク中_レ披_二此_一鈔_二日興_一時_レ彼ノ門流ハ粗勝劣ノ義ヲ存_二聞_一然_レ廣ク弘_二通_一スル之事_レ日興己後ノ事歟』文啓蒙講興云く『上野日興、御在生ノ間ハ本迹勝劣ノ法門ハ無_レ之_レ日興御入滅ノ後ニ門弟申出タル法門也』文久遠親帥傳燈抄下卷『惣_二テハ日興上人ノ五人謗法ハ立_二玉_一ヘルヨリ始_レテ僻見多々ナル方也能々可_レ糺_二三明_一之_レ』文其他刪畧五、六四本迹雪謗三十一等所論畧す。

然るに宗祖御傳記中にも、獨り彼の門流を掬せる熊田葦城の著あり、中當山前監督武田帥の辯明書を録す是れ他山の石として看る可き歟、己上に由りて之を觀るに、蓋し興尊天性聊か頑強にて、常に各老僧と圓滿を缺き、偶然延山住職問題の議

起るや、向尊及波木井公と不合、飄々然として靈廟を去りしに非ざる歟、其時興尊の心中果して、一派組織、異流唱導、延富對峙、等の思考ありしや、否や、所傳書多くは口傳的、にして幾多研究の末ならでは斷定ざるを得ず、前記せる統紀所述の如きも、波木井公の落髮は弘安四年と記す、然るに興師『弗于俗家、所不能識』と訓誡せし聊自家撞着あるを見る況や保守的退歩的の彼派の所懐をや、首肯の點何處にかある、今後又資料蒐集に努め更に陋見を披かむ識者幸に諒とし、愚子に教ふるに恪なる勿れ。

余の宗教觀

高一 小坂田 正己

凡そ我々人間が、世に生存して行く上に於、誰一人として煩悶苦惱のない者はない。生があれば死があり、老があれば病があり、戀の歡樂には必ず煩悶苦痛が伴ふ。此様に、人生の大海には幾多

の苦しみがある。人間は何うにかして、此の苦しみから脱れやうと考へた。そして、或る人生を超越した、崇高偉大なる者を求め、之を人格化して崇拜し、信仰し歸依し其事に依て自己の慰安幸福を得て現實の苦みを忘れやうと計た。此の人生を超越した或者を信仰し歸依し其に依て自己の慰安を計ると云ふが、即ち宗教である。であるから宗教と云ふものは第一義のものではなく第二義のものである。若し人生に色々の苦痛も亦く煩悶も亦く幸福であつたならば宗教の必要は起らない宗教の必要な譯は人生に色々の苦痛煩悶があるからである。故に宗教の起原に對する人々の見解が何の様に多種多様であつても自分は宗教も哲學と共に他の社會制度と同じく自己の生活を豊富にし活動を統一し平和を保ち幸福を増大しようとする人間生存上の欲求から起つて來たものだと思ふ。

既に宗教が人間の欲求から生じて來たものであるとしたならば、其の説明の仕方が色々に異つて居ても、要は人生を統一しようとして、設けられ